

保育の質の向上につながる 保護者との関係のあり方を考える

園にとって、保護者が園運営の「パートナー」であるか、「サポーター」であるか、それとも「サービスの利用者」とどまるかは大きな違いです。園運営のしやすさだけでなく、保育の質の向上にも大きな影響を及ぼすからです。これからの時代に求められる園と保護者の関係のあり方を見つめ直してみましょう。

インタビュー

保護者と同じ目線で語り合う姿勢が ともに子どもを育てる関係性を育む

保護者が保育や園行事に積極的に参加してくれるような関係性を育てるために園は何から始めると良いのでしょうか。玉川大学教育学部の大豆生田先生が保護者との関係を見つめ直し連携を深めるための具体的な方法を提示します。

保護者との関係を深めると 子どもが幸せになる

子ども・子育て支援新制度がスタートし、園を取り巻く環境が大きく変わる中で、保護者との関係性を見つめ直す動きが広がっています。

とても良いことだと思います。保護者との関係を深めて保育が豊かになると、子どものためになりますし、保護者の園に対する満足度も高まるからです。そうした園では保護者が保育をよく理解し満足しており、園運営はとても円滑で、小さな苦情はあっても大きなトラブルはほとんど見られません。

他方では、近年、保育の低年齢化や長時間化が進み、「園に任せっ放し」という保護者も多く見られます。こうした状況で保護者との相互理解が不足すると、園と保護者は、「サー

ビス」の提供者とその利用者という関係になりかねません。そうになると、保護者はことさらに便利さを追い求めたり、ささいなことがクレームにつながったりして、園として苦労が増えますし、子どもにとっての幸せや利益につながるとも思えなくなります。

「ともに子どもを育てましょう」というメッセージを発して保護者を巻き込んでいくか、それとも保育のサービス化を加速させていくか、今、園は大きな岐路に立たされていると言えます。

そもそも保護者は、園との深い関わりを望んでいるのか、という疑問もあるでしょう。確かに保護者は便利さを優先したり、面倒を避けたりする傾向はあります。しかし一方では、乳幼児期の子どものすばらしさを存分に楽しんだり、育児の苦楽を



玉川大学教育学部
乳幼児発達学科教授
大豆生田 啓友
おおまめうだ・ひろとも

◎専門は、乳幼児教育学・子育て支援。著書に『子ども主体の協同的な学び』が生まれる保育』（学研）、『保育が見えるおたよりづくりガイド』（赤ちゃんとママ社）など。



共にする友だちをもったりしたいとも願っています。そうした願いを叶える「場」として、子ども理解を支えたり、保護者どうしの交流を促したり、園にしかできないことは多いでしょう。

子育て家庭が孤立化しやすい時代ですが、園が保護者の交流する場として機能すると、そこにはコミュニティが生まれます。卒園後も地域で暮らすわけですから、コミュニティは生き続けます。園はそうした可能性を秘めた場であることをぜひ意識してください。

保護者が園の「サポーター」になると 園運営はとてもスムーズに

保護者との連携にはさまざまなレベルがありますが、まずは子どもの育ちを適切に伝え、保護者の声に耳を傾けて、保育のねらいが理解され、園に対する満足度が高まることを目指しましょう。いわば、保護者が園の「サポーター」となっていると、保護者は協力的になり、園運営はとてもスムーズになります。

その先を見つめると、良好な関係をベースとして、園内に保護者が主体的に活動できる場を設けるといふ連携の形もあります。例えば、保護者が保育に入って絵本の読み聞かせをしたり、バザーなど行事を運営したり、サークル活動に参加したりすることが考えられます。こうした活動は、保護者との信頼関係の土台があって、はじめて可能になります。

関係性を深める出発点は 子どもの成長を伝えること

それでは、園はどのように保護者との関係を深めていくと良いのでしょうか。

前提として、園の活動内容は保育者が考える以上に保護者から見えにくいとお考えください。園が、「ブラックボックス」のままでは、保護者に理解を求めることはできません。そこで適切な情報を発信することが、保護者と連携する出発点となります。

といっても、「今日は〇〇をしました」といった活動内容を伝えるだけでは不十分です。何も伝えないよ

りはもちろん良いのですが、保護者が本当に知りたいのは、「わが子はどうか成長しているのか」であることを意識してください。

そこで「こんな場面で夢中になっていましたよ」といった具体的なエピソードを伝えると、保護者は「自分の子どもをよく見てくれている」と感じます。さらにエピソードを通して、「どのような学びや育ちがあったか」を説明すると、「ただ遊んでいるように見えるけれど、そんな意味があるのか」と保育に対する理解が深まり、園に対する満足度も高まります。

ここで重要なのは、保護者に発信できる情報は、当然ながら保育の質に左右されるということです。例えば、禁止事項ばかりだったり、一方的に「させる」だけの保育だったりしたら、遊びの中での学びや成長は見えません。この場合、保護者には「今日は〇〇をした」といった情報しか伝えられず、遊びの意味は理解してもらえないでしょう。

これは、言ってみれば保護者との信頼関係を築く土台です。保育者はプロフェッショナルであるからこそ、遊びの見通しをもち、その意味や学びの物語を適切に伝えることができるのです。

子どもの姿を伝えるのに 必要なのは保育者の「感動」

子どもの姿を伝える際は、担任だけではなく、複数の保育者から声をかけると、保護者の園に対する信頼感はいっそう高まるでしょう。保育の質が高い園は、例外なく保育者たちが子どもの姿について語り合っ

います。語り合う文化を通して、子ども理解や遊びの見通しなどが深まっていくのです。

しかし一方では、若手を中心に保護者対応に苦手意識をもつ保育者が増えています。確かに難しいのですが、まずはあまり構えすぎないことが大切です。

保護者対応の基本は、子どもの姿を通して自分が感じたうれしい発見を素直に表現することです。「〇〇ちゃん、この遊びのとき、とてもすてきな笑顔でしたよ」など、ポジティブなエピソードをたくさん伝えてください。これだけでも、保護者に伝わるものはとても大きいようです。

逆に保護者対応で最も避けたいのは、何も伝えられないことです。保護者にとって、保育者が何を考えているかわからないことほど、不安な状況はありません。

「年齢の若い保育者の話はなかなか聞いてくれないのでは……」といった心配は無用です。保護者が気にするのは、保育者の経験年数や年齢ではなく、自分の子どもをしっかりと見てくれているかどうか、それ

が一番です。一生懸命に子どもの姿を伝えようとする誠実な気持ちは必ず理解され、信頼を得られるはずですよ。

ベテランの保育者も、子どもの姿を通してワクワクした気持ちを伝えることの大切さを忘れないでください。さらに経験を積むほど、感動した気持ちを学びに結びつけて考えられるようになるでしょう。それをエピソードとともに伝えれば、保護者の理解が得られやすいのは前述した通りです。

一見ネガティブな行為も成長のプロセスとして伝える

保護者に対して「伝えにくいこと」を伝えなくてはならない場面もあります。例えば、ある子どもが友だちを引っかいたり、かみついたりしたとき、みなさんは保護者にどう伝えるのでしょうか。

「〇〇ちゃん、今日もお友だちを引っかいてしまいました」と事実を伝えるだけだと、保護者は「私の育て方が悪いのではないか」と悩み、家で子どもを厳しく叱ったりするか

もしれません。

こうした場合は、子どもの発達段階を踏まえて丁寧に説明しましょう。例えば、「私がしっかりと見ていたら起きなかったと思います。ごめんなさい」と、まず、トラブルの責任は子どもにあるのでも、保護者にあるのでもなく、保育者としての自分にあることを前提にします。そのうえで、「今の時期にお友だちとトラブルが起こることには、こんな理由があります。だからそれも成長の証あかしなんです。しかも、がまんする力も伸びてきたので、これからは徐々に減っていくはずですよ」とお話すれば、保護者は、一見ネガティブな子どもの行為にも意味があることを理解してくれるでしょう。そして保育者が一緒になって自分の子どもの育ちを真剣に考えてくれていることに心強さを感じるに違いありません。

ドキュメンテーションで効率的に情報発信

情報発信は、連絡帳やおたより、またドキュメンテーションでも可能です。ドキュメンテーションとは、子どもの会話やエピソードの記述、写真などに保育者がコメントを添えるなどして発信する方法です。

例えば、ある園では、毎日のように保護者が目にする壁のパネルに当日の活動の写真とコメントを貼っています。写真は子どもの姿をわかりやすく伝えますし、それをきっかけに保護者とのやりとりが生まれることもあるでしょう。

情報発信の方法を検討する際は、なるべく保育者の負担を増やさな

ことも大切です。例えば、午睡の時間を使ったり、パソコン上のフォーマットに写真を置くだけで完成させたり、無理なく続けるために省力化の工夫をしましょう。

保育参加を通して、保護者に保育者の立場を体験してもらうのも、保育への理解を促す良い方法です。園内で子どもと一緒に過ごすと、日常の保育が具体的にイメージできますし、保育者の思いも伝わります。

保育参加で最も大切なことは、保護者自身に「保育ってこんなに楽しい」と実感してもらうことです。楽しさを実感することで、「遊びってこんなに大切なんだ」と保育の意義を理解することにつながる他、自分の子育てを見つめ直す機会にもなります。さらに、今後も園の取り組みに積極的に関わりたいと思い、園のサポーターにもなっていくのです。だからこそ、保護者が楽しかったと思えるような保育参加を目指したいものです。

信頼関係をベースにさらに一歩進んだ連携を

ここまで読んでくださったみなさんは、保護者との連携を深める基本的な流れを理解されたと思います。保育者と保護者が同じ目線で子どもについて語り合える関係をぜひ目指してください。

保護者は信頼関係が深まると、「子どものために、そして園のために」という思いから、日々の保育や行事などに対して協力的な姿勢を見せてくれるようになります。

例えば、ある園で子どもが草花を使った香水作りに夢中になっていま



した。すると、アロマセラピーに詳しい母親が自ら協力を申し出て、遊びがどんどん深まりました。

別の園では飼育するカエルがなかなかエサを食べてくれず、子どもたちが悩んでいました。そこでおたよりを通して保護者にヘルプを求めると、情報が寄せられたり、子どもにエサを持たせてくれたりして、問題が解決したそうです。

これまで日本の園は、保育を自園の中で完結させようとする傾向がありました。その意味では、閉鎖的だったと言えるでしょう。しかし、園だけでできることは限られていますから、遊びや生活の経験を豊かにするためにも、保護者や地域の力をもっと借りても良いのではないのでしょうか。保護者はいわば、様々な特技や趣味や職能を持った存在ですから、社会的資源として活用しないのはもったいないと言えるでしょう。

保護者との関係性が深まっている園では、ぜひ協力を呼びかけてみてください。その際は、強制や義務ではなく、「子どもたちがいま、〇〇に興味を持っています。〇〇について情報をお持ちの方、手伝ってくだ

さる方いませんか？」などと募集する「この指止まれ」方式にすることが、保護者のやる気を引き出すポイントです。

園内に積極的に入り込んでもらうために、サークル活動の導入も考えられるでしょう。こうした活動を始めると、最初は遠慮する保護者が多いのですが、実際に参加すると大半は「やって良かった」といううれしい感想を述べてくれます。

保護者がなかなか集まりづらい保育所では、例えば、月1回、お迎え時にクラスの枠を越えてお茶を飲みながらおしゃべりをする場を設けるなどの方法もあります。なかには、保育者や他の保護者と深く関わるのを苦手とするかたもいますが、それはそれでいいと思います。「参加したくなったら、いつでも参加できる」という雰囲気があると、保護者は気持ちが増えるはずですよ。

保護者の思いや考え方は人それぞれです。あくまでも一人ひとりの保護者との一対一の関係を大切にすることが、保護者との連携の支えになることを忘れないでほしいと思います。



事例 1

保護者の多様な経験や能力が 保育に生かされ、 園の遊びや生活をより豊かに

認定こども園 ゆうゆうのもり幼保園（神奈川県・私立）

保護者はさまざまな経験や能力をもっています。ゆうゆうのもり幼保園では、保護者の発想を生かし、保育者とは異なる視点から保育を豊かにすることを心がけてきました。そのベースにあるのは、保護者が居心地の良さを感じ、楽しく園運営に参加できるようにする環境づくりです。

保護者の理解と協力がなくては、理想の保育の実現は不可能

日常の保育の中に 保護者の姿が自然と溶け込む

保護者が読み聞かせや絵本の貸し出し手続きをしたり、お迎えに来た保護者が園庭で子どもたちに囲まれて遊んでいたりと――。ゆうゆうのもり幼保園では、保護者が日常の保育に自然と溶け込む姿がとても印象的です。2005年の開園以来、保護者との連携を大切にしてきた園長の渡邊英則先生は、次のように方針を語ります。

「本園は、子どもが思う存分に遊んだり、豊かな生活経験を積んだり

する中で、自分らしさを発揮できることを最も大切にしています。そうした保育は、保護者の理解と協力があってこそ実現が可能です」

行事の際には保護者の意欲的な参加が見られるほか、おやじの会などの活動では「こんな体験をさせると喜びそう」「こんな遊具を作りましょう」など、保育者にはない視点から保育を豊かにする提案を受けることが多くあります。例えば、屋内に可動式の滑り台を設置したり、夏に流しそうめんをしたり、芋掘りのあとに保護者がドラム缶で作製したお芋焼き器で焼き芋を作ったりと、保護



認定こども園
ゆうゆうのもり幼保園
理事長
幼稚園部門園長
渡邊 英則先生

者の発案による活動は数えきれません。

「多様な経験や能力をもつ保護者が集まっていますから、そのアイデアや力を保育に生かさない手はありません」と、渡邊先生は話します。

園では、保護者が運営に参加しやすくするしくみをととのえています。全保護者を対象とした「父母の会」のほか、「おはなしのもり（読み聞かせや絵本の貸し出し）」や「あみちく（編み物などの制作）」（写真1参照）といったサークル活動を設けています。さらに父親の参加を促すために始めた「おやじの会」も活発に活動しています。そのほか、新聞作り、ホームページ制作、お別れ

会の企画といった委員会活動でも、保護者の力を借りています。

「自分も参加したい」と 自然に集まりたくなる場づくり

多くの保護者は入園の時点から園運営に参加する気持ちをもっているのでしょうか。

「入園説明会では、園の方針とともに、保護者の協力で保育が成り立っていることを強調しますから、ある程度は理解して入園されます。それでも、最初から全員が積極的なわけではありません。そこで強制ではなく、みんなが楽しそうに活動するのを見て『自分も参加したい』と集まりたくなる場をつくることを心がけています」（渡邊先生）

例えば、園舎の一室を開放して保護者ルームとし、サークル活動をはじめ各種の集まりが活発になるように促しています。

保護者が気持ち良く参加できるように保護者どうしの関係性にも配慮しています。

「保護者の参加はプラス面が大きいのですが、保護者間の対立などのトラブルもまれに起こります。特に認定こども園は、就労・非就労という保護者の立場の違いが問題の原因になる場合があります」（渡邊先生）

そこでバザーなどの企画・運営では、夕方や土曜日にも話し合いの時間を設けるなど、就労の保護者の参加を促し、「一部の保護者だけで決めない」ことを大切にしています。

「本園は保護者の就労・非就労でクラスを分けていませんから、子どもからすると『お迎えの時間が少し違う』程度の認識です。そうした子

どもの姿を話し、ふだんから『ゆうゆうのもり幼保園として、みんなで力を合わせましょう』と呼びかけていることも、保護者の団結を促す心がけです」（渡邊先生）

園運営への参加を促すことが 「子育て支援」になる

保護者が居心地の良さを感じられる場づくりに力を注ぐのは、それが「子育て支援」につながっているからでもあります。

保護者の活動を通して、子育ての喜びや悩みを分かち合える友人ができるケースはとて多く見られます。特にこうした活動は、年齢の異なる子どもの保護者が集まるため、ある保護者の悩みに対し、「うちの子ども少し前はそうだった。きっと大丈夫よ」などといった助言が聞かれることが多くあります。そのように「横」だけではなく、「縦」の関係ができることは、保護者が少し長い目で育児を見つめる気持ちの余裕につながっていると思います。

さらに保護者は園の活動に参加することで、自分の子どもについて、保育者との関係、他の子どもとの関係など、いろいろな関係性を通して見つめ直すことができます。家庭とは異なる子どもの姿を見ることで、子ども理解が深まり、親としての成長が促されます。

「親が子どものことを理解するのは、子どもにとっても非常に幸せな



写真2 ● おやじの会で建てたログハウス。おやじの会のモットーは「できる人が、できる時に、できることを」。子どもの笑顔のために、保護者自身が楽しむことを大切にしています。

ことです。親どうしの関係性づくりも大切な『子育て支援』であるという気持ちで、保護者が気持ち良く集まれる環境をととのえています」（渡邊先生）

保護者の参加は、現場の保育者にも好影響をもたらしています。

「保護者に対して保育をオープンにするとごまかしはききませんから、プレッシャーがあるのは事実。ときには苦言もいただきます。しかし丁寧子どもに向き合う姿が理解されると温かい関係が育まれ、それが保育者には得がたいやりがいとなります」（渡邊先生）

保護者が園運営に参加するしくみをととのえるだけでなく、常に保育の質の向上を図り、それが理解されるように日頃のコミュニケーションを大切にします。そうした努力を続け、保護者、保育者、そして何より子どもと、みんなが喜びを感じられる関係性を築いていることが豊かな保育の実践を支えています。



写真1 ● 「あみちくサークル」の活動風景。「雑談が気晴らしになる」「バザーでの出品で喜ばれるのがうれしい」といった声が聞かれました。

認定こども園 ゆうゆうのもり幼保園

◎ 2005（平成17）年、横浜市「よこはま子育て支援計画」などの構想に基づいて開園。「子どもが子どもらしく育つこと」を第一とする保育を実践する。

理事長・幼稚園部門園長 渡邊英則先生
所在地 神奈川県横浜市都筑区早淵2-3-77
園児数 208人（0～5歳）

事例2

遊びの中で探求する子どもの姿をドキュメンテーションにして発信。子どもの興味を軸に家庭とつながる

仁慈保幼稚園（鳥取県・私立）

仁慈保幼稚園は過去に保育の方針を転換した際、なかなか理解が得られなかった反省点から、保護者への日常的な情報提供に注力しています。その中心となるドキュメンテーションでは、遊びの「プロセス」を重視した情報を毎日発信することで、保護者との対話を生み出しています。

情報発信や対話が保護者との連携のベースになる

1年間をかけて保育のねらいを伝えた

仁慈保幼稚園が保護者との連携を強く意識し始めたのは、2001年、妹尾正教先生が園長（現在は理事長）に就任して保育の方針を大きく変えたことがきっかけでした。

「一斉保育から、一人ひとりの子どもの主体性と協同性をより重視する保育に転換しました。それまで以上に子どもの育ちを促せるという信念がありましたし、保護者との関係は良好でしたから、すぐにねらいを理解して協力してもらえると考えていましたが、それは間違いでした」（妹尾先生）

それまでも保育観について発信してきたつもりでしたが、保護者側には十分に伝わっていなかったことに初めて気づいたと言います。

「『今まではこういう保育をしていましたが……』と話しても、『どういう保育ですか？』と、全然通じていなかったのです。子どもの姿や行

事を通して理解されていると、こちら側が勝手に考えていただけでした。保育観がバラバラでしたから、今後の方針を理解し合うのは容易ではありませんでした」（妹尾先生）

さらに一斉保育に比べて、「どのような学びや成長があるか」が見えにくいことにも反発を招きました。妹尾先生は保護者会などで、遊びや生活の中に学びがあることを繰り返し発信しましたが、言葉だけでは伝わりづらく、「遊んでいるだけではないのか」といった声が根強くありました。子どもどうしの学び合いや支え合いを促すため、3～5歳は縦割りクラスを編成しましたが、その意義も理解されづらかったと言います。

結局、保護者が園の方針に納得したのは、1年ほど経ってからのことです。保護者が子どもの変化や成長を感じたことが大きな要因でした。

「指示待ちの傾向が強かった子どもたちが、自らの興味・関心にしたがって多様な遊びを展開するように



仁慈保幼稚園
理事長
妹尾 正教先生

なりました。帰宅してからも、その日の遊びの内容や翌日にやりたいことを親にいきいきと話すようになり、次第に保護者に遊びの意味が伝わっていききました」（妹尾先生）

ドキュメンテーションをもとに保育者と保護者の対話を生み出す

以後、保護者に対して保育観を十分に伝えていなかったことの反省から、情報発信にも工夫を凝らすようになりました。とりわけ力を注いでいるのが、3歳以上の担任が毎日クラスごとに作成するドキュメンテーションです（9ページ中央上写真参照）。

ドキュメンテーションは、保育中にデジカメで撮影した写真に子ども

の言葉やコメントを添えたものです。PCの編集ソフトを利用して、午睡の時間に30分ほどかけて作成し、お迎え時に保育室の入り口に掲示します。特に重視するのは、「プロセス」を伝えることです。

「『今日は〇〇をしました』といった遊びの内容や結果だけではなく、どういう疑問や発想から探求が発生し、どのように展開したかといったプロセスを可視化することを大切にしています。プロセスの質を高めることが、保育の質の向上につながると考えているからです」（妹尾先生）

3歳未満は個の発達の側面が強いため、月1回、担任が一人ひとりの子どものドキュメンテーションを作成します。さらに3歳未満は、3カ月に1回、保護者が自由なフォーマットで家庭版のドキュメンテーションを作成して園に提出するという取り組みもしています。

「家庭での姿を伝えてもらい、保育者と共有するのがねらいです。保護者にも、子どもの育ちのプロセスを注意深く見つめてもらいたいという願いも込めています」（妹尾先生）

ドキュメンテーションは、情報発信の手段であると同時に、「対話」を生み出す、コミュニティ形成を促す機能をもつと言います。

「ドキュメンテーションで伝えられることは、ほんの一部に過ぎません。しかし、その内容をもとに、保育者と保護者が、また保護者どうし、子どもどうしが語り合うきっかけとなっていることに大きな意味があります」（妹尾先生）

お迎えの時間には、保育者や保護者がドキュメンテーションを前に、



写真●保護者が送迎時に必ず通る廊下に掲示しています。日を追って探求がどう変化したかを伝えることも重視しており、毎日楽しみにしている保護者は少なくありません。他のクラスのドキュメンテーションを眺める姿も見られます。

て保育への理解が深まるに伴い、保護者が園の保育に自然な形で協力する姿が見られるようになりました。

例えば、子どもたちが「塩」を作ろうと、園の近くにある「中海」の汽水を煮詰めると、黄色っぽい塩ができました。なぜ白い塩が出来なかったのか、子どもたちは理由を話し合い、「中海の水だからだ。日本海の水なら白い塩ができるかもしれない」という仮説を出しました。日本海まで徒歩では遠いため困っていると、それを知った複数の保護者が親子で車に乗って、日本海まで海水を汲みに行ってくれたそうです。

「子どもの興味は、園と家庭で連続したものであってほしいと願っています。園で生じた興味に沿って、家庭で遊びや生活が展開すると探求は深まります。逆に家庭での経験を園の保育にもち込むこともあります」（妹尾先生）

そうした考えから、ふだんから子どもの興味を軸として、園と家庭の遊びや生活を結びつけることを大切にしています。それが可能なのは、ドキュメンテーションなどを通じた情報発信や対話による相互理解という「コミュニティ」が土台にあるからなのでしょう。

「今日はこんなことがありました」「〇〇ちゃんの表情がすてきですね」などと会話する姿が、日常的な光景となっています。保育者は、遊びを通して探求するプロセスを見取することを心がける中で、子どもの心の動きを観察したり、遊びを見通したりする力を高めていきます。一方、保護者は、具体的なエピソードを通し、子どもが遊びの中でどのように成長しているのかを、保育者の専門性を通して実感的に理解します。

「保護者が困っていることを突き詰めると、『子どもをどう理解すれば良いのか』ということだと思えます。保護者との連携を考えるうえでは、その点をサポートすることを最も大切にしています」（妹尾先生）

ドキュメンテーションなどを通し

仁慈保幼稚園

● 1927（昭和2）年に開設。「昼間の家族を目指して、それぞれに、そして、一緒に」という保育方針のもと、子どもの主体性と協同性を重視した保育を実践。

理事長 妹尾正教先生
所在地 鳥取県米子市東町456
園児数 140人（0～5歳）

インタビュー

海外の先進事例を参考に 保護者の参画で保育の質向上を

園と保護者との関係性について海外に目を向けると、日本とは大きく異なる状況が見えてきます。保護者の参画が保育の質を向上させる重要な手法と見なされている海外との比較を通し、日本の園の現状や今後望まれる取り組みについて、日本総合研究所調査部主任研究員の池本美香氏が解説します。

量的拡大だけではなく 質の向上にも注目する必要性

保護者の参画について12カ国を調べましたが、海外と日本の園を比較すると、保護者との向き合い方がかなり異なります。日本では、保護者は保育者と対等というより、「支援」を必要とする弱い存在と捉える傾向があります。一方、海外では保護者はパートナーであり、園運営への保護者の参画は保育の質向上に欠かせないという考え方です。

どうして、こうした違いが生じているのでしょうか。海外では、国連の「子どもの権利条約」に基づき、すべての子どもにふさわしい教育や発達の機会を与えることが強く意識されています。そのため、園には子どもの考えを尊重して反映させる姿勢があり、まだ意見が言えない小さい子どもの代弁者として保護者の意見が重視されているのです。日本もこの条約を批准していますが、残念ながらこうした子どもの権利の視点からの議論はほとんど聞きません。

さらに保育には公的資金が注入されるため、その質が保障されることを求めるのは市民の当然の権利と考えられています。行政は保育の質を

高めるために、保護者に保育の質をチェックする役割を期待しており、気になることや困ったことは所定の窓口知らせるように周知しています。問題があっても遠慮して伝えられなかったり、どこに相談して良いのかすらわからなかったりする日本の状況とは大違いです。

現在日本では、待機児童問題の解消に向けて保育の量的拡大ばかりが目され、質にかかわる議論はおざなりだと言わざるをえません。「子ども・子育て支援新制度」をめぐる議論の中である程度は検討されましたが、職員配置基準や保育士の処遇、園庭の有無などが論点で、海外では保育の質向上のための重要な要素と考えられている「保護者の参画」については議論されませんでした。

国によって保育をめぐる事情は異なりますが、日本においても子どもの代弁者である保護者の声は、保育の質を改善するうえで貴重な材料となるに違いありません。特に今後は、財源の制約が厳しくなり、保育士不足も進む中で、保育の質を保障し、保護者や子どもの満足度を高めるためには、保護者の参画が欠かせないと考えられます。日本でも保護者の参画をめぐる議論が活発化すること



日本総合研究所調査部主任研究員
池本 美香
いけもと・みか

◎社会保障制度などを専門に研究。著書に、保育の質を高めるために保護者の力を活用する12カ国の政策動向を紹介する『親が参画する保育をつくる』、編著書に『子どもの放課後を考える』（共に勤草書房）など。

を強く望んでいます。

保護者を巻き込むことは 保育者の能力のひとつと考えて

海外では、保護者の参画を義務としたり、あるいは権利として保障したり、法的な根拠に基づいて保護者参画のしくみがととのえられています。さらに、日本の幼稚園教育要領

や保育所保育指針にあたるものが、国民に向けてわかりやすく説明されているなど、日本と比べて、保護者が保育についてよくわかっているようです。保育に関する知識があるからこそ、参画への気持ちが起こりやすい面もあるように思います。

このように保護者参画を促すうえでは行政の役割が大きいのですが、海外の実践の中には日本の園が独自に導入できる取り組みも少なくありません。

例えば、海外では保護者の代表者と保育者が意見を交わすパブリックな会議の設置が義務づけられている国があります。保育者が保育の方針を伝えたり、保護者が運営へのアイデアを出したりして、共通理解を深めていくのがねらいです。日本の園でも、こうした場を設けるのは難しくないと思います。保護者は自分たちの意見を聞いてくれる機会があれば、園のためにいろいろと考えて提案するでしょうし、園の事情を理解するにつれて協力を申し出ることも増えていく可能性があります。

日本のPTAや父母会は一見似ていますが、これらはあくまで任意団体であり、施設運営について対等に意見を言うことが法的に保障された場ではないのが大きな違いです。

もう少し緩やかな場として、お迎えの時間に「親の夕べ」と称して保護者どうしお茶を飲みながら歓談する時間を設けているデンマークの例がありました。このとき、保護者たちは保護者の代表者に園への意見などを伝えます。後日、代表者は他の保護者の意見をまとめて運営委員会で園に伝えるというしくみです。

保護者が園内にいつでも自由に立ち入ることができるのも、海外では当然の権利として認められており、園内に保護者専用のスペースが設けられている例もあります。

園にゆっくりと滞在してわが子が友だちと一緒に過ごす姿を見たり、保育者と子育てについて語り合ったりすることは、保護者にとって安心、楽しさ、自信につながります。そうした保護者が集まれば、地域のコミュニティは豊かになります。保護者や地域を育てることも、園の大切な役割と認識されているのです。

逆に日本では、送迎時などは安全管理上の理由からすぐに退出を求められることがあります。幼稚園と保育所で事情は異なりますが、もう少し保護者が園内で自由に滞在できる環境があっても良いと思います。

保護者への情報発信についても考えてみましょう。以前、子どもの通う園に私が、文部科学省が出している「幼児期運動指針」の内容をなぜ保護者に周知しないかを質問したところ、「『やらなければいけない』と負担を感じる保護者がいるので、あえて伝えていない」とのことでした。日本では、一律に全員が何かをしたり、させようとしたりする意識

が強過ぎると感じます。その裏返しとして有益な情報まで遮断してしまうと、保育の質向上に保護者が力を発揮できません。

海外では、全員ができないのは当たり前という前提があり、行政や園は「できる人はやりましょう」というメッセージを発しています。例えば、園環境の修繕や清掃に保護者の力を借りたいとしましょう。「参加できない人が後ろめたさを感じるので協力を求めない」のではなく、「参加できる人だけが集まって少しでも力になってもらう」と発想する方が、保育の質向上に結びつきやすいと思います。

これまで保育者は、「すべてを自分たちでやらなくてはならない」「保護者に負担をかけてはいけない」という思い込みが強かったように思います。むしろ保護者などの外部の力を上手に借りることも保育者の大切な能力のひとつと捉えることで、保育は豊かになり、保育者の負担は軽減され、何より子どもや保護者に大きなプラスがもたらされます。発想さえ転換すれば、すぐにでも協力してもらえる心強いパートナーが身近にいることをぜひ忘れていただきたいと思います。



Q & A 保護者と良好な関係を築いて、ともに子どもを育てるために

保護者との連携を深めるために、まずは一緒に子どもを育てる良好な関係性を築きましょう。現場の保育者が抱きやすい悩みに対して、3名の先生がたがお答えします。

回答者



玉川大学教育学部 教授 大豆生田 啓友先生



仁慈保幼園 理事長 妹尾 正教先生



ゆうゆうのもり幼保園 理事長・幼稚園部門園長 渡邊 英則先生

Q1 いわゆるモンスター・ペアレントが増えているような気がします。何が原因なのでしょう。



A1 保護者に原因を探だけでなく、園の情報発信のあり方を見直す

●玉川大学教育学部 教授 大豆生田 啓友先生

いろいろな原因が考えられますが、まず、モンスター・ペアレントをつくり出してしまう要因が園に隠されている場合もあることを知っておいていただきたいです。一般に保護者から園の保育は見えづらく、きちんと情報を提供しないと不安や不満が募りやすくなります。例えば、子ども

が切り傷や擦り傷をつけて帰ってきたのに理由が丁寧に説明されなければ、「何があったのだろう」と心配になるのは当たり前でしょう。そのように保育のねらいや実態を十分に伝えない状況で、保護者に対して「家ではこうしてください」といった要求ばかりしていると、「きちんと保育料を払って子どもを預けているのに、どうしてお願いばかりされないといけないのか」といった反発が起こりやすくなります。「この保護者はモンスター・ペアレントではないか」と思ったら、まずは園や保育を理解してもらうための情報を十分に提供しているかどうかを振り返ってください。

Q4 毎日、保護者に対して情報を発信するのは、時間的にも労力的にも大きな負担ではないでしょうか。



A4 日々の業務を精選したうえで負担のない情報発信の方法を模索

●仁慈保幼園 理事長 妹尾 正教先生

多忙な園の現場では、確かに情報発信は負担となり得ます。仕事を取捨選択する意識がないと、ますます多忙化してしまいかねません。一つひとつの仕事について「本当に意味があるか」を検討し、不要な仕事は思いきってやめることも必要でしょう。私の園ではそうした検討を行った上

で、毎日、ドキュメンテーションを通して保護者に情報を発信しています。子どもの姿について保護者に丁寧に伝えることは保育に欠かせませんし、ドキュメンテーションの作成を通して保育者の資質・能力の向上ももたらされるからです。その一方では、できるだけ操作性がシンプルな編集ソフトを利用するなど省力化の工夫もしています。

Q2 保護者が園の活動に参加すると、保護者間で派閥ができたり、トラブルが起こったりしないか心配です。

A2 保育者がコーディネーターになり保護者が熱中できるテーマを設定する

●玉川大学教育学部 教授 大豆生田 啓友先生

大勢の人が集まるのですから、当然、トラブルが起こる可能性はあります。保護者との連携がうまくいっている園ではそれを未然に防ぐために、主任クラス以上の保育者が保護者たちのファシリテーターやコーディネーターの役割を担い、良好な関係が保たれるように努力しているケースが多いようです。これは子どもでも同じですが、「みんなが熱中できること」が中心にあると人間関係は自然と良くなり、逆に退屈や不満を感じる状況ではトラブルが起こりやすくなります。保護者たちがワクワクすることに向かえるような場づくりを心がけてください。

Q3 保護者に自然な形で保育に参加してもらうためには、どのように働きかけるのが望ましいでしょうか。

A3 園から一律のお願いではなく、保護者からも申し出いただける関係づくり

●仁慈保幼園 理事長 妹尾 正教先生

保護者によって家庭や仕事の事情が違いますから、できることは異なりますし、園に望む距離感もさまざまです。園から一律のお願いをすると負担を感じる保護者が必ずいますから、できるだけ各人が望む関わり方ができるように心がけています。その点、ふだんから保育内容について丁寧に伝えていっていると、「〇〇を子どもたちに教えたい」「〇〇をもっているので使わないか」などと、保護者から協力を申し出てくれることがあります。そういうときは、明らかに保育の方向性から外れる場合を除き、ありがたく受け入れています。自然な形で保護者が参加できる状態をつくるのが理想と考えています。

Q5 保護者どうしのトラブルが実際に発生してしまった場合、園はどのようにサポートすると良いのでしょうか。

A5 保護者どうしのトラブルには速やかに保育者が介入する

●ゆうゆうのもり幼保園 理事長・幼稚園部門園長 渡邊 英則先生

基本的に保護者どうしではトラブルは解決できないと考え、迅速に介入するように心がけています。担任や主任が対応することもありますし、深刻な状況なら園長の私が出て行く場合もあります。その際、双方の言い分をよく聞くという姿勢を伝えることを大事にしています。また、園の中心には子どもが存在し、大人は子どものために協力し合って動いていることを考えるように促すと、保護者も協力しなればという気持ちになりやすいようです。



Q6 父親にはどのように参加してもらうと良いのでしょうか。

A6 父親ならではの視点を遊びや環境づくりに生かしてもらう

●ゆうゆうのもり幼保園 理事長・幼稚園部門園長 渡邊 英則先生

うちの園では開園当初から「おやじの会」として活動しています。父親は行事などで園を訪れても他の保護者と打ち解けるのに時間がかかるのですが、おやじの会のような父親主体の活動があると積極的に動いてくれるかたが少なくありません。母親とは異なる視点で保育を見守ってくれることが多く、園内で子どもが小さなケガをしたことが問題視されたときには、おやじの会のメンバーが中心になって「それは仕方のないことだ。これまでの保育を変えないでほしい」とサポートしてくれました。またユニークな視点から遊びや環境づくりを提案してくれるなど、園の運営に欠かせない存在です。